

香川日独協会会報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

K A G A W A



第 2 号

Nov. 1993

【国際交流に思う】

香川日独協会会長 細川 清

最近、国際交流、国際交流とどこでもよく聞く言葉となっているが、実際によく考えてみると、なかなか事は難しいことだと思う。政治、経済、法律、教育、交通、はては家庭など、様々な分野で国際交流が盛んである。

わが香川日独協会も、そのひとつの形であろう。設立以来日も浅いが、国際交流に値するようなことを果たしてやっているか、やったか、はなはだ心もとない。

会員同士の意識の総和を受けて、協会丸は航跡を描くのだろうか。それとも、舵取りが、あっちに振り、こっちに回して、航路に変化を与えるものなのだろうか。前者は、静かで自然な風の航海かもしれない。平凡で波静か、落ち着く先がみえているような船旅であろう。後者は、一見面白そうに思われるが、その船のゆれの楽しみが、ややもすれば、パイロットのひとりよがりの押しつけになるかもしれない。かえって船酔いになってしまう人が出るかもしれない。

文化団体を支える文化は、文字通りカルチャーであって、文明とはやや異なる。文化は、文明開化を含むかもしれないが、むしろ、人間の精神的価値の成果を云々するものである。たんなる技術文明の発展とは異なるものだろう。

このあたりにわが協会を位置づけるとすれば、香川に日独協会も誕生した、そして、いろいろな分野でこれをひとつの拠りどころとして、多彩な枝葉は伸びていくことに期待すればいいのではないか。ある人はドイツ語そのものに精通したいと、ある人はドイツという国柄が好きでたまらない、ある人はドイツの文学に思いをはせる、そしてある人はドイツの自然環境に興味を抱いているなどである。文化は、次元や諸々の要素をふるいにかけて、そしてわずかに残って光る石の結晶のようなものだからである。比較文化から、わが国の文化を眺め、ドイツの文化を知る上で、香川日独協会はさらに前進充実しなければならない。

【新香川県国際交流員 P. Himmelstein氏より】

Mein Name ist Peter Himmelstein. Ich bin 27 Jahre alt und habe, bevor ich nach Kagawa kam, an der Universität Bonn Japanisch, Koreanisch, Wirtschaftswissenschaften so wie Deutsch als Fremdsprache studiert. Während dieser Zeit habe ich auch ein Jahr in Japan verbracht.

Da ich nach meinem Studienabschluß erneut nach Japan gehen wollte, freue ich mich sehr, nun als "Koordinator für Internationale Beziehungen" in der Abteilung für Internationale Angelegenheiten tätig zu sein.

Es gibt viele Gründe, warum ich mich für das JET Programm beworben habe. Allgemein gesagt, interessiere ich mich schon seit meiner Kindheit für fremde Länder und Kulturen und so waren während meiner Gymnasialzeit Englisch und Französisch meine Lieblingsfächer.

Desweiteren bin ich der Meinung, daß die Länder des östlichen und westlichen Kulturkreises zukünftig auf vielerlei Gebieten, beispielsweise in Umweltfragen, intensiver werden zusammenarbeiten müssen. Zwingende Voraussetzung dafür ist jedoch das gegenseitige Verständnis insbesondere zwischen Japan und Deutschland leisten.

Letztendlich ist das JET Programm auch eine gute Gelegenheit, meine bisherigen Aktivitäten in Bonn fortzusetzen. So war ich als Vorstandsmitglied der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn für die Organisation und Durchführung von Veranstaltungen (Vorträge über Japan, gemeinsame Ausflüge etc.) mitverantwortlich. Das JET Programm bietet mir daher eine gute Grundlage, meine bisherigen Erfahrungen auf andere Ebene, sprich in Japan, anzuwenden.

Meine Arbeit hier in Kagawa umfaßt zunächst Deutschunterricht sowie englische Zeitungslektüre über deutsche Themen. Für den Herbst sind zudem Besuche in Grundschulen vorgesehen.

Desweiteren möchte ich in unregelmäßigen Abständen Zeitungsartikel und Vorträge über deutsche Wirtschaft, Politik, Gesellschaft und Kultur verfassen.

Mein besondere Aufgabe ist die Förderung des Austausches zwischen der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa und der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn.

Konkret bedeutet dies Übersetzungen für den Bereich des Informationsaustausches sowie Vermittlung von gegenseitigen Homestays zur Förderung der menschlichen Kontakte. Sowohl in Kagawa als auch in Bonn gibt es außerdem Interessenten für Praktika in japanischen und deutschen Firmen. Die Vermittlung solcher Praktika ist mir ein besonderes Anliegen. Sollten Sie Fragen, Wünsche oder Anregungen haben, können Sie sich jederzeit an mich wenden.

In der Hoffnung auf gute Zusammenarbeit

Herzlichst
Ihr Peter Himmelstein

私はドイツから来ましたペーター・ヒンメルシュタインです。今年で27歳になり、香川県に来る前に、ドイツのボン大学で日本語、韓国語、経済学と外国語としてのドイツ語を勉強していました。学生時代に日本に留学した経験もあります。

大学を卒業してから、日本語を使える仕事につきたいと思っていましたので、国際交流員として香川県の国際交流課に勤めることができて、とてもうれしく思います。

JETプログラムに応募した理由について

私がJETプログラムに応募した理由は色々ありますが、一般的に言えば、外国語や異文化コミュニケーションに非常に興味があるからです。例えば高校で英語とフランス語は私の大好きな科目でした。

その他に、将来には様々な分野で、例えば公害問題について、西洋文化圏と東洋文化圏に属している国々の協力が必要になるのではないかと思います。しかしこの協力の一番大事な前提条件はそれぞれの国の相互理解ですね。私は国際交流員として特に日本とドイツの相互理解に小さい貢献をしてみたいと思います。また、JETプログラムは今までドイツでやっていたボランティア活動を続けるいい機会です。つまり、ドイツのボン独日協会の幹部会員として私は日本人とドイツ人の相互理解を進める講演やミーティングを主催する任務がありました。JETプログラムはそのような経験を別な範囲で、つまり日本で応用するいい機会なのではないかと思います。

香川県で何がしたいかについて

仕事の内容についてはドイツ語の講座とドイツに関する英語で書かれている新聞記事を読む会を受け持ちます。秋になったら小学校を訪問する予定もあります。

その他に、日本人が知りたいと思うドイツ経済、政治、文化等に関する記事やスピーチを試みたいと思います。

私の特別な課題としては香川県日独協会とドイツのボン独日協会との交流を進めることがあります。これは具体的に言えば、情報の交換に対する翻訳をしたり、相互のホームステイを軸として人の交流を始めたりすることです。又は、日本の企業で研修したい若者がいますが、香川県にも同じような人達がいるので、このようなことをぜひ実現させたいと思います。ご質問もしくはご希望があったら、どうぞご遠慮なくいつでもご連絡ください。

ペーター・ヒンメルシュタイン

* 日本語原文のまま

* ヒンメルシュタインさんの連絡先: 香川県総務部国際交流課 ☎0878-31-1111 内線2048

【ボン独日協会と姉妹縁組】

1993年春、当協会は旧西ドイツの首都ボンのボン独日協会(Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e. V.)と姉妹縁組を結びました。この縁組は中村敏子副会長のご尽力により実現したもので、その間のいきさつ・独日協会ボンの様子や今後の見通し等については中村副会長が7月27日・28日付の四國新聞にお書きになっておられます。その記事を以下再掲載いたします。

《ドイツつれづれ》[ボン独日協会との姉妹縁組]

草の根から発足した香川日独協会は、この春、ドイツ・ボン独日協会と姉妹関係を結んだ。自治体經由でない協会同士のこうした結びつきは、全国ではじめての試みとして注目されることとなった。

今、世界はボーダーレスとはいえ、交流のきずなは人と人との出会いにはじまり、互いに心のぬくもりと琴線にふれるときめきを持ってこそ深まるものである。

日本とドイツ・二つの国をつなぐかけ橋は瀬戸のさざ波を、滔々と流れるラインを一気に飛び越え、出会いの不思議と素晴らしさを教えてくれた。◇

ボン駅で支線に乗りかえ、なだらかな丘のつづく郊外の小さな駅・バート・ゴードスベルクに着いた。メンヒェ夫人のさそいに思い立ち、一人電車でやってきた。

「日本人は、めったに降りないのですぐわかりますよ。私が迎えにでます」という夫人のことばをたよりに、人びとの流れに沿って階段を降りた。地下道で丸顔に眼鏡をかけた中年の婦人が近づいてきた。その人のしぐさにふっと日本人の気配がただよい、穏やかな顔つきに目がやさしく光った。

「中村さんですか」「やっと会えましたね」

古い友達に会った時のようにうれしく心がはずんだ。

ボン独日協会事務局長・マリアンヌ・メンヒェとの出会いはこうしてはじまった。ドイツ大使館員のご主人と日本で暮らした経験のある彼女は、東洋の生活文化によくなじみ、時にはおせっかいすぎる日本の人情にどっぷり浸り、自分がどうにもならない「日本びいき」になっていることを、帰国後はっきり知ったという。今は、歴史あるボン独日協会の大所帯を楽しみながらてきぱきと切りもりしている。

発足してまだ日も浅い香川日独協会は、折々にこうしたドイツ各地の協会と連絡をとり情報を集めようとしていた。そんな折の今年の1月、ドイツに滞在中、何気ない私の1本の電話からボン協会の女性スタッフたちと会う機会ができた。

ライン河畔につらなるジーベン・ゲビルゲ(七連山)のゆるやかな山なみをはるかに、ナナカマドの赤い実を道端にみながら、やがて車はメンヒェ夫人宅に着いた。

寒々とそびえるシラカバ、シャクナゲ、黄色い小花をつけたエニシダ、和紙のように乾いた花のマンサクなど、初夏の花らんまんがあまりに華やかなだけに冬の庭は、この家も寂しい。機能的な造りのドイツ家屋は、日本から持ち帰った石とうろうをすえた庭をかこんで、各部屋が明るく上手に設計されている。通された部屋には大きなモミの木のクリスマス飾りがあり、テーブルの上にはモミの小枝で作った燭台にろうそくの火が燃えていた。まだ松の内の日本を思いあわせてみると、何かにつけて興味深くおもしろい。

やがて次々とメンバーが集まり、中でもドイツ人と結婚されたシュミット・陽子さんがあらわれた時には、うれしく安堵した。

桃の花が一面に咲く丘から青い海をのぞんだ和田邦坊画伯の版画と香川の観光パンフを土産に披露した。来日経験のある人たちだけに郷土の紹介に熱が入る。歴史を刻んだ重みのある建物、青い水と石

組みと緑の調和する庭園、ことに瀬戸内の光映える海、青い島々。大きな歓声をあげた彼女たちの声が一瞬おちた。瀬戸大橋の通行料金が低いと口々にいう。あの縦横に走るアウトバーンが無料であるドイツ人にとっては考えられない料金だと思う。

「私、寅さんの大ファンなの」とメンヒェ夫人が胸の上で手を合わせ、うれしそうに体をゆすった。協会の映画会でも寅さん映画は一番の人気の、日本各地を旅して折々の気持ちを画面でみせてくれる格好の「日本の旅」紹介作品でもある。あの心の機微を巧みに伝え、見る人の気持ちをふるいたたせてくれるこの映画は、夫人の応援歌なのかもしれない。

香川日独協会の報告かたがた、ボン協会の様子を聞く。行事報告書は大変な数にのぼり、各行事のスナップ写真はどれも見ごたえがある。在職中、協会のために尽くされた木村前ドイツ大使ご夫妻の姿があらゆる行事にみえる。ついにドイツに住みついてしまわれた共同通信OBの吾郷ご夫妻の姿もある。日本人会員の層も厚く、会員総数は350人余。

幅広い分野で日本を理解しようとする積極的な姿勢がうかがえる。昨年度の大きな行事は、ライン河畔まつりに参加しての催しで、生け花展とその講習会、お煎茶の点前、日本庭園の案内説明など。ぶどう酒の試飲会、日本料理店での試食会もおもしろい。講演会は「へんろ道」「神道」「地蔵」「葛藤と調和の一党支配」など一歩ふみこんだテーマが目にとまる。

心づくしの手料理をかこむころにはすっかり打ち解け、話題も広がり、もっぱら皇太子妃内定のニュースが中心となった。久方ぶりのドイツ家庭料理は、リンゴとジャガイモのタルト、丸いカセロールに焦げめもおもしろいそうについている。フェルト・ザラート(野のサラダ)と赤カブのサラダ。

「このフェルト・ザラートは7回も水洗いしましたの。砂はありませんか」サラダ菜の一口サイズぐらいの大きさでとても歯ざわりがよく、独特の清涼感があり、冬場のマーケットにみられる風物詩でもある。

「長く温めてきた計画」として夫人から打ちあけられたのは、帰り支度中のことであった。

「私たちのこんなすてきな出会いを大きく育てていきませんか。香川との姉妹縁組を望みます」。

突然の話であったが、互いに協力し合うことに異論はなく、この話は日本に持ち帰ることとした。何度かのドイツ行きの中で、こんなに「詰まったトランク」を運んだことはいまだなかった。

ボンの対応は実に真摯ですばやかった。この提案は双方の理事会ですみやかに了承され、事務局間の手紙のやりとりののち成立した。さしあたっては、情報の交換とともに相互のホームステイを軸とした人の交流をはじめることが望ましい。遠い国・日本をこの目で見たい人がある。日本の企業で研修したい若者もいる。また香川にも同じように待っている人たちがいる。

そして昨日、一人の青年がボンからやってきた。国際交流員として赴任した彼が、日本とドイツを複眼視してどのような切り口で語りかけてくれるだろうか。待たれることである。

香川日独協会副会長・中村敏子

*『ボン独日協会』(Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V.)の住所は【事務局から】をご覧ください。

【ジュニアオーケストラ香川・ドイツ演奏旅行】

関西からドイツへ行く時は、デュッセルドルフ経由パリまで、という便が何年か前まであったが、今はなく、不便になったなどと思いつつ、香港経由のルフトハンザ機は、フランクフルトへ着いた。

同空港でパリ行きに乗り継ぎの間、楽器を持った子供達の集団を見て、フランス人の団体客が話しかけてきて、話が盛りあがり、ついに待合所でミニコンサートをやっけてしまい、それまでの疲れを忘れさせてくれるようなゆかいなことになる、待合所のアナウンサーまでが、マイク片手にブラボーと放送する始末、何と短く感じた乗り継ぎだったことだろう。

パリのホテルは郊外にあり、その日はぐっすり。オペラ座はシーズンオフのため中まで入れてもらい、旧団員で在フランスの石井敏資君との再会、遊覧船での夜景など、すてきなパリだった。

ウィーンに入り、夜のコンサート鑑賞頃から発熱する者が少し出はじめ、一同気をひきしめ、ドイツ入りを前に全員で心身共に準備をした。

フランクフルトからバスでエトリンゲンまで、幕の内弁当を食べながらの景色は、個人的には冬から春のほうがいいなと感じていた。

エトリンゲンのミュージックシュレーには1時間半くらいで到着した。そこから市役所の広報の人の案内で、街の説明をききながら、市役所まで歩いて行った。イタリアとの関係が深いこと、町全体を古き良き時代にもどすために町並みはもとより道路もピンコロ石にはりかえ、いかにもドイツ村というこじんまりときれいな町づくりになっていることで、まるでおとぎの国の中にいるようだった。

コンサートホール、お城を見学しながら、市の歓迎会場へ。そこでは思いもしていなかった盛大な歓迎会をしてもらい、贈り物の交換、お互いの市の話など、とても気さくな市長さんと実のある話がたくさんできた。

そのあと、ミュージックシュレーで練習。なるべく日本人どうして並ばないように配慮され、我がジュニアオーケストラ香川の団員は緊張した面持ちで指定された席について、すぐ練習に入った。指揮者はトルコ人のイルディス氏で、緊張をほぐそうとユーモアたっぷりの指導に、楽しい練習となった。

エトリンゲン市は人口3万8千で、ミュージックシュレーで学ぶ学生は1700人。合奏室、アンサンブル室、個人練習室など、立派な施設に50人を越える教授陣。あらゆる面で芸術文化に対する価値観の高さに感心し、また、うらやましく思った。

練習2日目は少し慣れてきて、指揮者も本気で怒ったり、熱が入ってきた。その夜に交歓会が行われ、心なごむ楽しいパーティになりました。子供達もあちらこちらで住所の交換やゲームなどでとても仲の良い関係になり、名残り惜しい思いの中、次の日の本番にそなえ、早目に閉会した。

本番当日は、市民ホールでのリハーサル、本番のために、ミュージックシュレーの先生方は、譜面台を運んだりイスを並べたり、大忙しです。私達のために夏休みあけ早々に特別コンサートを開いてもらい、忙しい思いをさせて申し訳なく思いながらセッティングを手伝いました。500人位収容の近代的なホールですが、日独合わせて80名位のオーケストラで、ステージは少しせまく感じられた。

今回のドイツ公演で、私が一番感銘を受けたのは、祝日の練習から指揮者のうしろで、いつもじっと聴きいていた9才の男の子だった。お姉ちゃん二人がバイオリンとチェロ。「ぼくはトランペットをやりたい」と、何時間もの練習にずっとつきあい、その眼差しが音楽を追っているのだ。このような子供は日本では育っていないと思う。結局本番の日には、私と二人で舞台のそでで裏方をやり、

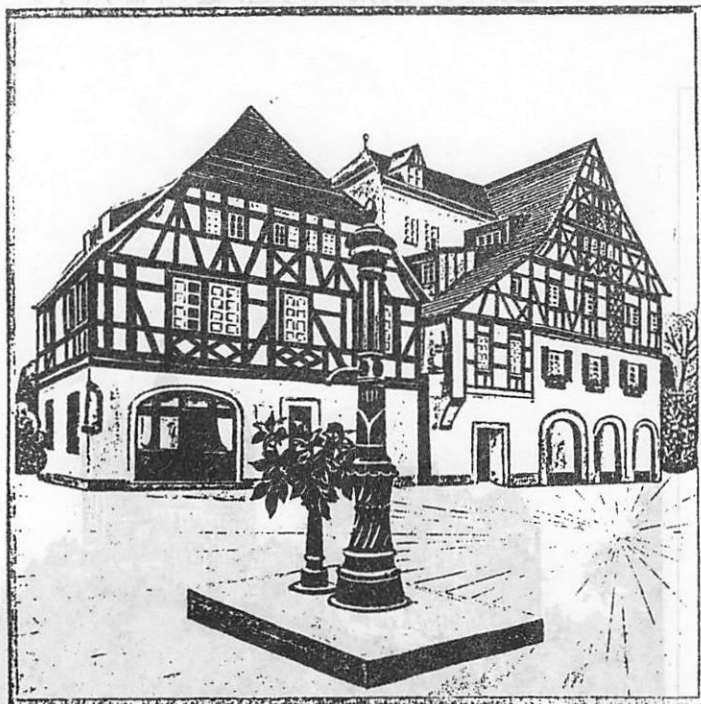
拍手で指揮者やソリストを送りだしていた。二人の、ほおづえをついた腕の間から、目と目がときどき合う。40何才と9才の目は、同じレベルで話し合っていた。

なんとも言いようのないカルチャーショックだった。

翌日は、バスでフランクフルトへもどり、ゲーテハウスなどの見学のあと少しの自由時間、疲れている者はひとりもなく、皆いきいきとしていた。きっといいドイツの想いを抱いて帰っているのだろう。

ジュニアオーケストラ香川代表 宮崎 節二

*エトリンゲン(Ettlingen)はバーデン・ビュルテMBERG(Baden-Württemberg)州のカルスルーエ(Karlsruhe)のすぐ南の町です。



↑エトリンゲンの木骨組住宅(Fachwerkhäuser)

*ジュニアオーケストラ香川のエトリンゲン到着と
8月22日の合同演奏会を伝える地元の新聞記事⇒

In der Schloßgartenhalle

Konzert mit Orchester aus Japan

Ettlingen (krk). Nach dem Besuch des Kinder-musiktheaters Gatschina im März steht nun am Wochenende eine weitere internationale Begegnung der Musikschule Ettlingen an. Am heutigen Freitag trifft eine 28köpfige Besuchergruppe aus Japan ein. Dabei handelt es sich um das Kagawa Junior Orchestra der Musikschule Takamatsu, der Hauptstadt der Präfektur Kagawa auf der Insel Shikoku im Südwesten Japans. Das japanische Orchester kommt mit 26 jungen Musikern im Alter von elf bis 17 Jahren, sowie zwölf erwachsenen Betreuern unter Leitung von Setsuji Miyazaki, Direktor der Musikschule Takamatsu. Höhepunkt des Besuchs in Ettlingen wird ein Gemeinschaftskonzert des Sinfonieorchesters der Musikschule Ettlingen und des japanischen Orchesters am Sonntag um 20 Uhr in der Schloßgartenhalle sein.

Das japanische Orchester befindet sich auf einer einwöchigen Europareise, die von langer Hand vorbereitet wurde, denn es ist keine touristische Reise, sondern sie dient dem Studium der europäischen Musik. Entsprechend dem hohen Standard aus der Musikausbildung in Japan wurde bei der Auswahl der Stationen in Europa – vor Ettlingen nur noch Paris und Budapest – großer Wert auf die Zusammenarbeit mit hervorragenden Orchestern gelegt. Der Kontakt zu Ettlingen kam über die Konzertpianistin und Musikpädagogin Maho Kaneko zustande, die Direktor Miyazaki die Musikschule Ettlingen empfohlen hatte.

Nach dem Eintreffen der jungen Japaner gibt es heute zunächst eine Stadtführung und einem Empfang durch den Oberbürgermeister im Schloß, anschließend eine erste gemeinsame Probe der beiden Orchester zum Kennenlernen. Unter Leitung von Riza Yildiz, der auch beim Gemeinschaftskonzert die Stabführung hat, sind am Samstag tagsüber intensive Arbeitsproben und abends ein gemütliches Beisammensein geplant. Die Verständigung erfolgt teils auf englisch, teils auf japanisch; denn neben Maho Kaneko sind an der Musikschule Ettlingen noch zwei japanische Lehrkräfte tätig. Am Sonntag sind tagsüber wieder Proben und abends dann das Konzert in der Schloßgartenhalle.

Um 20 Uhr werden sich dort rund 80 junge Musiker aus Ettlingen und Takamatsu für drei Orchesterwerke auf der Bühne versammeln. Im Mittelblock des Konzerts stehen, ebenfalls in deutsch-japanischer Besetzung, mehrere Kammermusikwerke auf dem Programm, ehe zum Abschluß wieder beide Orchester komplett vereint noch zwei Orchesterwerke von Reger und Bizet bieten. Gespielt werden unter anderem auch Werke von Pachelbel, Carulli und Haydn. Für das Konzert am kommenden Sonntag um 20 Uhr in der Schloßgartenhalle ist der Eintritt frei.

《マナティに会った日のこと》

春休みの4月3日に、屋島へマナティを見に行きました。わたしはマナティがどんな物かは今まで知りませんでした。けれど、係のおじさんの話や、ビデオを見ていると、アザラシにいて、ゾウ科の動物だということが分かりました。マナティの好物はサニーレタスだそうです。わたしはアザラシにゾウの鼻がくっついている動物だと思いました。マナティは、世界的にいる量が少なく、ぜつめつすんぜんの動物なのだそうです。マナティは1年間を通して、あまり水温



の変化のない所を好みます。それに向いた池がアメリカにあります。その池は、海につながっていて、池というより川だまりといった方がいいかもしれません。その池は、観光客が多く、モーターボートなどで、マナティを見にくる人がいるので、そのボートのスクルーで、池の上の方を泳いでいるマナティはけがをして、きずがつき死んでいくことが多いそうです。このこと

は、わたしにもとてもいい勉強になりました。

お話を聞いた後で、本当のマナティを見に行きました。めずらしい形の動物で、自然を大切に、ぜつめつしないようにしたいと思いました。

山本 悠佳

*山本さんは、1993年4月3日の『屋島水族館・屋島寺を訪ねて』遠足に参加された小学校5年生です。マナティはドイツ語では Seekuh(海牛)と言い、屋島水族館のマナティはドイツ・ニュルンベルク生まれで、名前はベルク君、近々やはりドイツからお嫁さんをもらう予定とのこと。

《リンブルク》

汽車の扉が開いた。

すずやかな風が吹きこんでくる。

少年の瞳に光と雲と風が映る。

彼の前に、重い荷物の老人が汽車を降りた。

デッキに荷物を置いたまま降りた。

老人が振り向いて自分の荷物を取ろうとしたとき、

少年は手を差しのべたのである。

荷物は意外に軽かった。

『ダンケ』の声が聞こえる。

少年は軽くうなずいて、ほほえんだ。

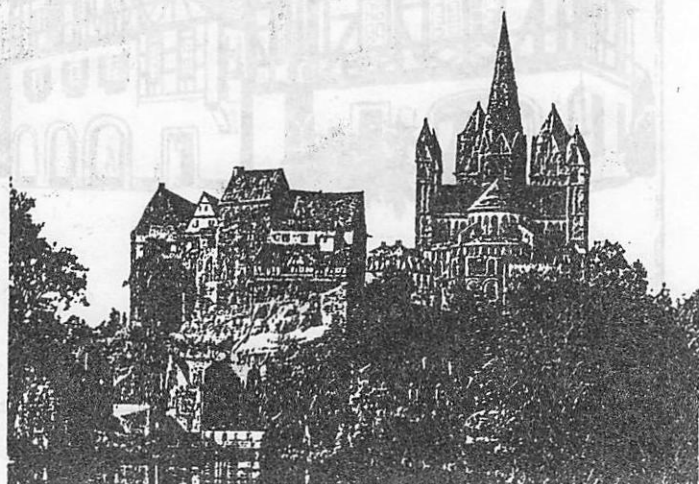
何が少年をそうさせたのだろう。

空にはさわやかな風が吹き、

少年は遠い目をしている。

やわらかな早春のリンブルク駅だった。

田淵 昌太(学生会員)



*田淵さんは、1993年3月に1ヶ月ほどドイツを旅行した香川大学の学生さんです。またリンブルク(Limburg)は、13世紀に建てられた聖ゲオルグ大聖堂(上図)で有名な、ライン川の支流ラーン河畔にあるドイツ中部の町です。

《BMW》

BMWというあだ名を名乗る知人がいる。彼によると、それは車の名前ではなく、自分がよく訪れるバイロイト(Bayreuth)、ミュンヘン(München)、ウィーン(Wien)の3つの都市の頭文字であるらしい。これらの都市名で、ワーグナー好き、オペラ好きを想像することは極めて容易でしょう。

私がドイツ語を勉強したのも、これらの都市でオペラを見るためであり、機会をみて何度でも出かけたいものですが...

日独協会の音楽愛好家の皆さん、どうぞよろしくお願いします。

最上 英明(普通会员)

《フランクフルト国際見本市》

このたび私どもが香川県の有名各所をデザインしました作品(製品)が来年2月19日(土)~2月23日(木)の期間にドイツ・フランクフルトで開催される「フランクフルト・メッセ・アンビエンテ'94国際見本市」に出品参加することになる予定です。つきましては、会員の皆様でドイツ観光等で国際見本市を見学される方がおられましたら私ども(0877-28-5192)又は、香川県企業振興課内の香川県貿易協会(0878-31-1111 内線2522)までご連絡下さいましたら内容等につきまして詳細なことをお知らせしますのでどうぞ!

記

1. 会 期: 1993年2月19日(土)~2月23日(水)
2. 会 場: ドイツ・フランクフルト国際見本市会場
3. 主 催: 社団法人 全国物産観光斡旋機関連合会
4. 出品物: 陶磁器、ガラス製品、漆器、木工製品、刃物、室内装飾品、食卓厨房用品等を中心とした消費財の製品、ただし食品は除きます。

笠井 強(普通会员)

*メッセ(Messe)は笠井さんもお書きになっているように『見本市』のことです。

この12月から来年3月までのドイツでの見本市開催都市とその[内容]をご参考までに幾つかご紹介しましょう。

12月4日~12日: ライプチヒ見本市(Leipziger Messe)[旅行・キャンピングカー]

1月25日~30日: ケルン国際見本市(Int. Möbelmesse, Köln)[家具製品]

2月3日~9日: ニュルンベルク国際見本市(Int. Spielwarenmesse, Nürnberg)[おもちゃ]

2月6日~10日: ケルン国際見本市(Int. Süßwaren-Messe, Köln)[お菓子]

2月19日~23日: フランクフルト国際見本市(Int. Frankfurter Messe Ambiente)

3月6日~9日: ケルン国際見本市(Int. Eisenwarenmesse, Köln)[鉄器類]

3月11日~16日: フランクフルト国際見本市(Int. Musikmesse, Frankfurt/Main)[音楽]

3月19日~27日: ミュンヘン国際見本市(Int. Handwerksmesse, München)[手工業製品]

【ドイツ文化紹介】

小田 博史

ドイツ文化の輝かしい財産として、今もなお、世界で愛されているのが、グリム童話です。

グリム童話は、言うまでもなく、グリム兄弟(Gebrüder Grimm)によってドイツ各地に伝えられていた昔話を集大成したものです。

グリム童話というと、会員の皆様は、どのお話を思い起こされるでしょうか？ 「白雪姫」「赤ずきんちゃん」「眠れる森の美女」といったなつかしい昔話を思い出す方が多いことと思います。

ここでは、そういう話とはひと味ちがうグリム童話を紹介いたします。

人間の寿命 [グリム童話より]

昔、神様が世界をお造りになったとき、動物たちの寿命を決めることになりました。神様は、最初は、どの動物にも30年の寿命を与えるつもりでいました。

まず、ろばが呼ばれました。神様は、「お前に30年の寿命をあげよう。」と言いました。すると、ろばは慌てて、「神様、それはよしてください。いくらなんでも、それでは長すぎます。私は、毎日重い荷物を背負って暑中、苦しんで仕事をしなければなりません。そんな私に30年は長過ぎます。もっと減らしてください。」と言いました。そこで、神様は、「わかった。それでは、18年にしよう。」と答えました。

次に犬が来ました。神様は、「お前は、ろばのように重い荷物を運ぶことはない。だから30年の寿命をあげよう。」と言いました。すると犬は、「神様、よしてください。私は番犬です。夜も寝ないで番をしなければなりません。人を見つけたら大声で吠えなければいけません。これは、つらい仕事なのです。30年は長過ぎます。もっと減らしてください。」と言いました。神様は、「わかった。それでは、12年の寿命をあげよう。」と答えました。

次に猿が来ました。神様は、「お前は、重い荷物を運ばなくてもいいし、吠え立てなくてもいい、だから、30年の寿命をあげよう。」と言いました。すると猿は、「神様、それはよしてください。そんなことはしない代わり、私はピエロのようになって、おかしいことをしたり、おもしろいことを言って笑わさなければいけません。これは私には、とてもつらいことなのです。30年は長過ぎます。どうぞ減らしてください。」と言いました。神様は、「よし、わかった。それでは、お前には10年の寿命をあげよう。」と答えました。

最後に人間が来ました。神様は、「お前に30年の寿命をあげよう。」と言いました。すると、人間は、「神様、それでは短すぎます。これからだというときに死ななくてはなりません。もっと長くしてください。」と言いました。神様が、「では、ろばの18年を足してあげよう。」と言ったのですが、人間は満足せずに、「まだ短いです。」と言いました。「では、犬の12年をあげよう。」

「まだ短いです。」「では、猿の10年をあげることにしよう。」「それならいいです。」

このようにして、人間の70年の寿命が決まりました。ですから、人間が本当に人間らしく生きられるのは、最初の30年だけなのです。次に来るのはろばの18年です。妻子という重荷を背負って働きづめの18年です。それから犬の12年がやってきます。この時期は、人生の疲れや不満から、やたらガミガミと犬のように吠えまわります。そして最後の10年は、頭がぼけてきて、変なことを言ったり、したりしてみんなから猿のように笑われる10年です。

これが人間の人生なのです。

「グリム童話には、こんな話もあるのか。」と思った方も多いことでしょう。

グリム童話は、ゲルマン民族の心を知る上で、とても参考になるすばらしい物です。

ドイツ人の物の考え方を理解するため、グリム童話を読み直してみたいかかと思っています。

【ドイツからの便り】

《ドイツの山歩き》

鎌野 寛（在ドイツ）

ドイツ人がこよなく愛しているスポーツに山歩きがあります。そのことについて、私が経験したことをお話ししたいと思います。

これは7月のある日、研究室の仲間10人程でフライブルクの北西に位置するカイザーシュトゥール（皇帝の椅子）と呼ばれる山にハイキングに行った時の出来事です。

私達は、正午前に、山の麓のキャンプ場に食料と飲物を置いてから頂上に登り、そして午後の2時には、キャンプ場に戻って来て、昼食のバーベキューを食べる予定でした。頂上までは約1時間半程で登ることができました。その日は天気がよかったので、そこからフライブルクやフランスの町を眺望することができました。

そこで休憩を取った後、下山することになりました。しばらく下って行った後、ひとりの女の子が地図を見ながら、“何かおかしい、道をまちがえたんじゃないの。”と言ったのですが、みんな気にもとめずどんどん下りて行きました。

1時間後、麓についたのですが、そこは食料を置いてきた元のキャンプ場とは全く違う、一面のブドウ畑でした。私達は、ブドウの手入れをしている人にキャンプ場の場所を聞いてみました。すると、その人は“今下りてきた道を登って反対側に下りるように。”と言いました。同僚の研究員のオリバーがリーダー役をつとめていたのですが、彼は“こっちの方が近道だ。”と言って別の道を登りはじめました。皆もそれについて登って行ったのですが、やがて道は消滅し藪の中にはいりこんでしまいました。カールハインツは“完全に迷子になってしまった。”と笑いながら言いました。それでもオリバーはくじけず藪をつききって行こうとしました。それでも無理やり歩いて行くうち一本の道に出ることができました。その道を登って行くか下って行くかで議論になりましたが、オリバーの“今は午後の3時で太陽がこっちの方角だから東はあっちだ、下って行けばキャンプ場に着くことができる。”との一言で下って行くことになりました。山道を下って行くうちに、私は、なんとなく見たような風景だなと思ったのですが、その先は案の定、ブドウ畑でした。

さすがに、今度はおとなしくもときた道を頂上近くまで登り正しい道に戻りキャンプ場にたどりつきました。山を登ったり下ったりほぼ3往復して、結局、キャンプ場で昼食？をとったのは午後の5時を過ぎていました。

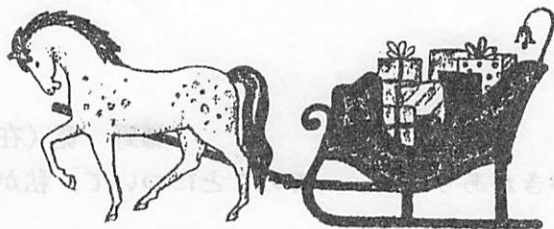
ドイツ人達は登り下りを繰り返し、道に迷っても文句を言いません、むしろそれを楽しんでいる節さえあります。日本人のグループが登山し道に迷ったとき、その内の誰かが、オリバーと同じことをしたならば、きっと、皆から、別の反応がおこるだろうことは想像にかたくありません。

ドイツ人の辛抱強さと散策好きに Prosit!



*鎌野さんは新進気鋭の内科のお医者さんで、この夏からドイツ南西部フライブルク(Freiburg)にあるマックスプランク(Max Planck)研究所で、文中にもあるカールハインツ・クレンプナウアー博士(Dr. Karl Heinz Klemphauer)のもと、研究員として勤めておられ、はるばる故郷高松へ原稿を送って下さいました。

【まもなくクリスマス】



キリスト教徒でなくとも何かしら胸のときめくクリスマスが近づいてきました。今年のご家族皆でドイツのクリスマス菓子を作ってみてはいかがでしょうか？

ご参考までに、昨年の講習会で好評でした【Honigkuchen】の作り方をお伝えします。

Bald nun ist Weihnachtszeit ...



fröhliche Zeit! Jetzt ist der Weihnachtsmann gar nimmer weit ...

Horch nur, der Alte klopft draußen ans Tor mit seinem Schimmel, so steht er davor ...

Leg ich dem Schimmelchen Heu vor das Haus, packt gleich der Ruprecht den großen Sack aus ...

Pfeffernüss, Äpfelchen, Mandeln, Korinth, alles das schenkt er dem artigen Kind ...



《Honigkuchen(蜂蜜クッキー)》

材 料

バター: 60g	蜂 蜜: 170g
砂 糖: 80g	ココア: 大匙 1
薄力粉: 400g	B. P.: 小匙 1
塩: 小匙 1/2	卵: 小1個
粉 糖: 150g	卵 白: 1個分
その他: 香辛料(オールスパイス)*	
色素, レモン汁	

*ドイツでは、9種類の香辛料を混ぜ合わせたものが販売されています。

作り方

① 鍋に蜂蜜, 砂糖, バター, ココア, 香辛料を入れ弱火にかける。木杓子で混ぜながら十分に溶かし、さましておく。

↓

② ボールに粉とB. P.をふるい入れ、これに塩と卵を割り入れてから、①を加えてよく混ぜ合わせる。

↓

③ ②を一つにまとめラップで包み、一晩冷蔵庫で休ませる。

↓

④ ③の生地を4mmの厚さにのばし、好みの型で抜く。吊るす場合は穴をあけておく。

↓

⑤ 160℃で15～20分焼く。

↓

⑥ アイシングを作る。粉糖に溶きほぐした卵白を加えよく混ぜた後、レモン汁を入れ固さを調節する。

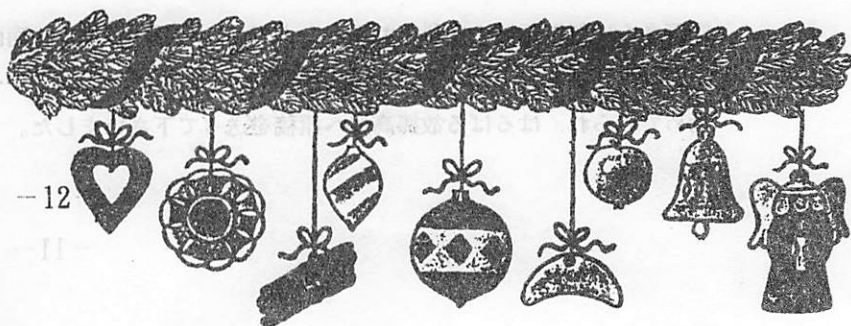
↓

⑦ 小さな器に⑥を分けて、色素を加え好みの色を作る。

↓

⑧ 完全に冷ましたクッキーに⑦で模様を描く。

*レシピ提供: 羽白 由美子



【活動行事報告】

香川日独協会事務局

1992年

11月11日～12月11日：『ドイツのお祭り"写真展"』主催〔日本長期信用銀行高松支店ロビー〕

ドイツ観光局提供のドイツ各地のお祭りの写真を、解説を県国際交流員のC.マルヒョウさんをお願いして展示し、一般の方にご覧いただきました。芳名録には53名記帳されています。

11月14日：『コルンフーバー教授講演会』主催〔高松グランドホテル〕

香川医大酒井俊一教授のお計らいで、ウルム大学神経生理学教授のH. H. コルンフーバー博士をお招きし、スライド映写をまじえてお話しいただきました。旧東独ドレスデンのR. フェッチ博士も同席され、重成憲裕理事の流暢な通訳のもと、講演会には24名参加、後の懇親会には16名が出席しました。A氏の質問に端を発して、話題は日独の宗教観の相違にまで発展し、非常に格調の高い会合となりました。

12月13日：『ドイツ菓子講習会』主催〔ヨンデンプラザ高松〕

羽白由美子さんを講師に、子供4名を含み25名の参加でドイツのクリスマスの蜂蜜菓子を焼き、ちょっと早目ながらドイツのクリスマスパーティ気分を味わいました。

1993年

3月2日：『理事会』開催〔高松共済会館〕

この理事会で中村敏子副会長より、ボン独日協会との姉妹縁組の提案が出され、全員一致で同協会と姉妹縁組締結が了承されました。

4月3日：『春の遠足・屋島水族館、屋島寺を訪ねて』主催

約20名参加し、屋島水族館ではドイツ生まれのマナティについて水族館の方からお話しいただいたり、屋島寺を訪れて晴天に恵まれた春の1日を楽しみました。『会員の声』欄に山本悠佳さんの作文を掲載してあります。

5月13日：『バンベルク交響楽団高松公演』後援〔県民ホール〕

7月2日：ボン独日協会よりシュミット夫人来高

7月12日～18日：『ドイツ週間』主催・県国際交流課後援

12日～16日：第2回『ドイツ写真展』〔県庁ギャラリー〕

1992年11月の第1回開催に続き、ドイツ観光局提供のドイツ各地の風景・名所の写真やポスター計31点を展示し一般の方にもご覧いただきました。

17日：『講演会：素顔のドイツ』〔ヨンデンプラザ高松〕

県国際交流員C.マルヒョウさんを講師に、ドイツ紹介のビデオ・スライドを中心にお話しいただきました。一般の方も含め約50名ほど参加されました。

18日：『ドイツ料理教室・ドイツの黒パン』〔ヨンデンプラザ高松〕

これもC.マルヒョウさんの指導のもと、24名参加し焼き上がった黒パンをドイツワイン・ハム・チーズと共に試食し、ドイツの味を楽しみました。

8月15日～24日：『ジュニアオーケストラ香川・演奏旅行(パリ・ウィーン・ドイツ)』後援

これについては、主催者の宮崎節二氏よりご寄稿いただいておりますのでご覧下さい。

余談ながら、当初この演奏旅行は高松からヨーロッパ直行便をチャーターすることになっていて、当協会でもそれに便乗するドイツ旅行を計画し、会員の皆様から参加者を募るところまで話が煮詰まっていたのですが、最後の最後で飛行機がチャーターできなくなり、香川日独協会初のドイツ旅行は先送りとなってしまいました。

8月18日：『会員親睦ビールパーティ』主催〔ヴェルデカーサ〕

C.マルヒョウさん後任の県国際交流員P.ヒンメルシュタイン氏の歓迎会を兼ね、県国際交流課の長野陽副主幹にもおいいただき29名参加で親睦を深めました。中村副会長宅にホームステイするM.ヴァレンフェルス君も飛び入り参加したり、ドイツに関するクイズ大会も催してまさにゲミュートリッヒ(gemütlich)な一晩でした。

8月20日：『会員名簿』発行

今年度に入って多数の方を新会員に迎えましたので作成しました。今後も改訂版を不定期に発行する予定です。

29日：『第1回香川チター音楽祭・チタートリオミュンヘン演奏会』後援 [高松テルサホール]

高松屋島の地に新しくできた500名収容のホールがほぼ満員になる盛況で、昔懐かしい『第三の男』等南ドイツの香りに満ちたチターの音色を満喫しました。

【事務局から】

◆寄贈図書その他

◇1993年8月18日：ボン独日協会より

(1)ビデオテープ・『ベートーベンの生家(Beethovens Geburtshaus)』：VHS、約15分、日本語解説付

(2)ベートーベンのカセットテープ

①『Beethovens Klavier』：「ピアノソナタ(作品110)」・「6つのバガテル(作品126)」Jörg Demus演奏

②『弦楽四重奏曲ト長調(第2番)』：Silzer四重奏団演奏

*いずれもボンのベートーベン生家記念館所蔵の当時の楽器による演奏録音です。

(3)書籍・『Japan und Europa: Getrennte Welten?』：Hanns W. Maull編集、Campus社発行、ドイツ語

(4)パンフレット・『ハイリゲンシュタットの遺書(Heiligenstädter Testament)』

*ベートーベンの有名な遺書の原文コピー(ドイツ語)、英・仏・西・日本語訳付

◇1993年9月3日：熊本独日協会より

『熊本独日協会創立30周年記念誌』

◇1993年9月29日：宮崎節二・ジュニアオーケストラ香川代表より

絵画集・『Ettlingen Stadtansichten』：INFO社発行、ドイツ語・仏語・英語解説付

◇1993年9月29日：中村敏子副会長より

写真集・『Lebendiges Ludwigshafen』：Ludwigshafen am Rhein市発行、ドイツ語解説付

◎このほか、定期的に以下の協会より寄贈されています。

◇財団法人日独協会より 機関紙・『Die Brücke』

◇財団法人香川県国際交流協会より 『グローバルKAGAWA』

◇財団法人高松市国際交流協会より 『TIAニュース』

◇岡山・神戸各日独協会・香川日英協会・香川日仏協会より 『会報』

*以上いずれも事務局にて保管しています。

◆ボン独日協会 (Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V)

c/o Marianne Mönch

Auf dem Köllenhof 47 5307 Wachtberg-Ließem

Deutschland (Germany)

【編集後記】

私にとっては、会報の編集は、初めての仕事だったので、わからないことだらけでした。発行が遅れて迷惑をかけたことをお詫びいたします。

私も上智大学ドイツ語学科在学中は、みっちりドイツ語を学び、ドイツ文化にも触れる機会が多くありました。(ドイツ語の授業だけでも、週：4時間ありました。) でも、小学校の教員になってからは、ドイツ語ドイツ文化と接する機会は皆無に等しかったです。ドイツについて学んだことは、「青春の1ページの思い出」くらいにしか考えていませんでした。

それが、香川日独協会が設立されることになり、自分の故郷にもドイツを愛する人達がたくさんいることを知りました。そのことは、私にとって大きな感激でした。また、「香川日独協会には、自分を必要としてくれる人達がいる。」という思いが、私のような者が理事の大役を引き受けさせることになりました。

今後も会員の皆様にドイツのすばらしさを知っていただくため、微力ながら協力させていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

理事：小田 博史

春の理事会で会報編集責任者として小田理事を決定し、会報編集作業がスタートしましたが、途中で小田理事が公私ともに非常にご多忙になったため、私が編集業務を引き継ぎました。

会報の編集は楽しい反面、色々繁雑なことも多くなかなか大変な作業です。次号の会報編集においては、会員の皆様方より積極的なご参加ご協力を切に望んでいます。

今回は『手作りの会報で』の趣旨でワープロによる編集とし、大きさも国際サイズのA4版としてみました。『写真の掲載がない』・『読みにくい』等ご不満もあるかと思います。次号へ向けての皆様の率直なご意見ご助言をお聞かせ願えれば幸いです。

また最後になりましたが、忙しい中、快く印刷業務を手伝って下さった香川医大一般教育事務室の近藤広美さんに心よりお礼申し上げます。

理事・事務局長：羽白 洋

香川日独協会会員数
(1993年11月22日現在)

賛助会員	46名
名誉会員	5名
学生会員	13名
普通会员	146名
計	210名

香川日独協会会報 第2号

1993年11月発行

発行：香川日独協会事務局

Japanisch Deutsche Gesellschaft KAGAWA

〒761-07 香川県木田郡三木町池戸1750-1

香川医科大学ドイツ語研究室内

TEL(FAX) 0878-91-0822

発行責任者：細川 清

編集：小田 博史 / 羽白 洋

ワープロ文責：羽白 洋

印刷：香川日独協会事務局